
ストライクウィッチーズ Gift From Heaven

幻想飛行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ Gift From Heaven

【Nコード】

N9782P

【作者名】

幻想飛行

【あらすじ】

リベリオン空軍にある日突然、世界的に珍しい男子のウィッチが入隊してきた。彼の名前は由希・ボング。彼の起こしたまぐれで、さらに第501統合戦闘航空団へ送られることに。そこから色々出来事が起こる話です。オリキャラもかなり出す予定です。

プロローグ・・・「新人魔女？」（前書き）

この小説を投稿させてもらっている幻想飛行です。

とりあえず一言だけ言っておきます。

これはかなりの素人が書いた小説です。

それでも良ければどうぞ読んでみてください。

ブログ・・・「新人魔女？」

《This is Ribberion Air Force 401th AETF.sergeant, please tell the situation》

（こちらリベリオン空軍第401航空遠征航空団。軍曹、現状を伝えてください）

「Sights are all clear, no enemy seen in this two hour」.

（障害物なし、ここ二時間、敵を見ていない。）

《Roger. Keep on search operation.》

（了解。索的行動を続けてください。）

「Roger！」
了解！

身長160cmあるかないかぐらいの軍曹と呼ばれている少年は太平洋上空、

高度5000mを上官を先頭に翔ている。

見上げれば快晴の青空、
見下げれば白い雲の海と大海原の狭間で彼らはきよるきよる回りを見渡し中。

少年が足に履いているのはストライカーユニット、ドーントレス^{SBD・5}。そして彼の身長よりも明らかに長い筒を肩から掛け、その腰に装着してあるポーチみたいなバッグには銀色の弾と銃弾でぎっしり、

さらにポーチの反対側には皮製の巨大なホルスターには一丁の銃が備えられていた

この時代、空を飛ぶときには武器の一つや二つは持っておくのが一般的になっている。

しかし彼の装備している武器は通常のととは一味違った。

その中の一つ、彼が肩に掛けている緑色の長く、いかにも重そうな筒。

これは中距離対装甲用無反動砲、M18 57mm無反動砲。ブリタニアのとある人物が開発した個人携行形無反動砲の改良版。

火薬を使用せずに自らの魔力を爆発させて砲弾を打ち出す小型の戦車と

言い換えれるような武器。本来なら陸上で使用すべきものを空中で使用するため

手を加えリボルバー式に改造しすぐに再装填できるようになった。

腰ポケットの銀色の弾は、火炎手榴弾。

正式には「K S手投げ弾」と呼ばれているがそんなことは少年にとつてどうでもいらしい。

弾の上部にあるピンを^{安全装置}を外し、敵に投げて爆破させる爆弾。

扱い方を一歩間違えれば大参事になるのだが彼はそれを気にしていないというか

それ自体に全く気が付いていない。

ついでに説明しておく巨大なホルスターには散弾銃のM 5 0 0が備えられている。

離陸の際ホルスターが床に擦れないためにちよつとした合金の力バーが

下のほうに付けられている。

彼の使用武器の共通点、見ればわかるかも知れないがそれは“破壊力持つこと”と“爆発する”点である。

しかし、彼自身の容姿はそんな厳つさを一切感じさせないあまり筋肉のない姿。

顔つきも穏やかで、目は薄い藍色をしていてやさしい母親を思わせるたれ目である。

少年曰く、母親の方がのんびり屋な顔つきをしていたためその影響だと。

そんな容姿の頭の白くセミロングな髪の間からは、雪のように白い三角形の耳が、

履いている膝あたりまで切り落としたズボンの腰上部に開いた穴からは

上に巻いているふさふさした白く、長い尻尾が現れている。

彼は“魔女”と呼ばれる存在で、一般的にウィッチは女子がなるものだが、彼は
奇跡的に生まれたときから膨大な魔力をもっていたためなれたらしい。
ウィッチになるためには色々と面倒なことをしないとイケないらしいがそこは略します。

入隊早々、彼はテスト飛行も兼ねて初小型ネウロイの撃墜任務の最中。

「アーネスト中尉、ネウロイって何処にいるんですか？」

「おかしいわね…この辺にいるはずなんだけど」

アーネスト中尉と少年に呼ばれている女性の金色の瞳の片方は鮮やかな紫色に輝いている。
どうやら彼女はある魔法を発動させていて、それでネウロイを探している様子。

「何処にいるんだろう…」

少年がそんな独り言をぶつぶつ呟いていたそのとき

突然雲の上に黒い小さな丸い影ができたのが少年の視界に入り反

射的に後ろを振り向いた。

そこには丸っこいボール状の黒い塊があった。

それはすぐに赤く染まり、アーネストにビーム光線を放ってきた。

「中尉！後ろ！！」

「しまった！！いつの間に！！」

少年が慌てて叫んだのにブラシウは気が付き、
とっさにシールドを張ってそれを防いだ。

「このネウロイ、私たちのことを偵察していたのか。最近のネウロイは変ね」

早速攻撃しようと手榴弾を腰ポケットから取り出そうとするが
何かを思い出したのか、手を止めた。

「（…おっと、先にアーネスト中尉に許可とんなきゃな）」

彼は少し呆れた声を漏らしてしまいつつも

耳の通信器インカムの向こう側にいるアーネストに報告した。

「ネウロイ発見！アーネスト中尉、ここは僕一人でやらせてください！！」

アーネストが考え込んだのか、一瞬だけ通信器からの応答がなかった。

「…いいわ。しかし、危なくなったら何が何でも撤退しなさい。わかったね？」

「はい！」

「それでは、行きなさい！由希・ゆづき・アイラ・I・ボング軍曹！」

「了解！！」

こうして今回の主人公、由希は初のネウロイ戦に向かった。

「さて、お手並み拝見って所ね…」

ブログ・・・「新人魔女？」（後書き）

と、まあこんな感じにスタートしたストライクウィッチーズGift From Heavenでしたけれどもどうでしたか？ 自分的にはあんまり話がまとまっていなかったような気がします…が、そんなこと気にしたらいつまでたっても書けなくなってしまうので正直自己評価なんて気にしてません！ 次回は本格かはどうかわからない由希の戦闘シーンに入りたいと思っています。あと、次からこの後書きには主人公の由希にきてもらいますのでそこるところもついでによろしく願います。

長々と話してすみませんでした。以上、幻想飛行でした。

chapter1・・・「初めの大二歩」(前書き)

初っぱなから戦闘シーンです。
自分で言うのもなんですけど...
やはり変ですね。

chapter 1・・・「初めの大二歩」

アーネストに許可を貰って何分が過ぎたのだろう、
由希はネウロイの次に移動する場所を予測し
M500の弾を撃ち込むが
目標が小さいせいなのか弾が一つも当たらずに避けられた。

「当たらない…」

そんな一言を口にし顔をしかめた。

そんなことをもろともせずにネウロイは
次から次へとビームを放ってくる。

シールドを使いそれを防ぎきったようにも見えた。
が、その一つに対応し切れなかった由希は頬にかすり傷を負い、
小さな舌打ちをした。

ちょこまかちょこまか移動しては攻撃の繰り返しを行ってくる
黒い物体にイライラしてきた彼はグリップを握っていた手には
いつの間にか力が入っていた。

それに気づいたのかアーネストの声がインカムからしてきた。

「落ち着きなさい由希、ここは戦場、
冷静な判断ができなければそこで負けよ」

「うお！そうでした」

突然の問いかけに少々びっくりしたが、
由希は一瞬にして我に返った。

「いったん退却します？」

「いえ、まだいけます」

短い会話を終え、再び戦闘に集中するため敵の位置を…
確認したのだが、そこには一機ではなく複数のネウロイがいた。

「んな！！」

思わず変に裏返った声を発してしまった。
すかさず距離が離れていたアーネストも魔法を発動させ敵の方を
見る。

その目に映ったのは由希も見ただ複数のネウロイと、通常の
肉眼では見えない敵の唯一の弱点にして破壊目標でもある
ネウロイの“コア”である。

さらにそれは敵一機一機の中にあつた。

「うそっ…増えた!？」

この異例事態には流石に驚きを隠せない様子。

「中尉は来なくていいです」

未来を予想したかのように由希はアーネストにインカムで
話掛けた。

「でもあなたは大丈夫なの？」

「はい。まだ魔力も残って増すし、自信はないけどたぶん全部落せます。だからやらせてください」

しばらくの沈黙。

「…許可を出しますが、命令を一つ追加します。
…“必ず生きて帰還すること”」

「Roger!!」

由希はそう返事した後、敵を再び確認した。
さつきより数機増えていたものの、
だいたい10機前後で全て同じ形をしていた。

幸いにも広範囲を巻き込める武器を持っていたので
どうにかできそうと由希は思った。

(…今思ったけど動かないんだこいつら?)

彼の疑問に思っていたことは本当だった。

ここ数分ずっと話したり考えていたりしたときに
ネウロイは攻撃できたはずだが、一向に攻撃してこなかった。

そんなことを考えているのと同様進行でバグの中から手榴弾を
3個取り出し、戦闘態勢に入った。
それと同時にネウロイも動いた。

全機が赤く染まり、少し時間をずらして光線を放ってきた。

「こんな展開だと思った」と心で言い、シールドを展開、
手に持つてる手榴弾のピンを全て口で外してぶん投げた。

うち一つが当たったらしく爆破。

それに直撃したネウロイ1機は装甲関係なく砕け散った。

周りにいた2機は爆風に巻き込まれ装甲が一部破損しコアが
むき出し状態。

もう2、3個投げつけもう2機撃墜。

しかし、いきなり真下が赤く光ったのがわかった

「ちっ、下か！」

3機のネウロイに気をとられていた間に下に回り込まれたのだろ
う、

残りのネウロイが円になり1機が中心にいるフォーメーションを
とっていた。

少し避けるのが遅かったのか光線がひじをかすった。

無意識にバッグに手を伸ばし弾を取ろうとしたとき、
バッグから手榴弾の1つが落ちた。

「あ。」

由希にはこの一瞬がかなり長い時間に感じた。
その瞬間彼の耳にはどこか懐かしく優しい声がした。

（由希、指を鳴らしてごらんなさい）

その声に導かれるように親指と中指を合わせ…

…パチン…

打ち鳴らした。その瞬間、敵近くまで落ちた
ピンが外れていないはずの手榴弾がもの凄い爆音と
爆風と共に爆破した。

それはまるで溶岩が溜りに溜った火山が
大噴火を起こしているような恐ろしくもすごい迫力の光景だった。

「！！！！」

ずっと機関銃を持っていたでもいけるように
戦闘待機をしていたアーネストはまたの突然の出来事に
今度は120%の驚きが顔に出ていた。

その後に爆風が襲い掛かってきて即座にシールドを展開した。

爆発の衝撃で真ん中にいたネウロイはもちろん、
その周りにいたネウロイも完全に巻き込まれ
コアも見事に壊れた。

「由希さん！」

爆発はすぐに収まり、あたりは煙だらけ。
しかし彼女は未だに魔法を発動させていたため由希の
位置は見えていた。

「由希、大丈夫なの？」

アーネストは由希の近くまでより無事が確かめた。

「は…はい…」

しかし彼は完全に疲れ果てていた。

「全然大丈夫じゃないじゃない！
魔力の使いすぎよ！」

よく見てみる頬とひじの傷以外にも数箇所
に痛々しい傷を負っていた。

「す…すみません…あれ魔法…だったんです…か？」

「話さないで。魔法かは知らないけどあなた使いすぎよ」

「……………」

「でも命令は守ったのね…良かった」

「当然で…すよ…上官命令です…から」

その言葉を最後に由希は気を失った。

アーネストにはその気を失った顔は
やりきったぜ！という風に見えたのだろうか、
顔に母親のような笑みを浮かべた。

chapter1・・・「初めの大二歩」(後書き)

幻「まあこの話で二章目になりますが楽しんでいただけたでしょうか？」

由「いきなりだけど話がシリアスすぎる気がする」

幻「はつきり言ってその通りかもね」

由「・・・」

幻「まあ話については置いておいてと」

由「一つ伝えたいことがあるらしい・・・よね？」

幻「よくわかりましたね。人の心読んでません？」

由「そんなことはいいいから早く言ったら？」

幻「そうでしたね。改めて言います。

・・・間違いがあつたら申し訳ございません」

由「そんなだけかい！」

幻「そんなことで以上、幻想と由希がお送りしました」

キャラクター設定1（前書き）

とりあえず（しなくてもいいと思う）息抜きだと思います。
毎回言いますが、
間違いや変な変だと思つところがあれば遠慮なく言ってください。
お願いします。

キャラクター設定1

名前：由希・I・ボング

性別：男

誕生日／年齢：12月24日／15歳

身長：158cm

所属部隊：リベリオン第401航空遠征航空団

階級：軍曹

使用武器：M18 57mmリボルバー式無反動砲

M500（散弾銃）

火炎手榴弾

使い魔：ホワイト・スイス・シェパード・ドッグ

由希が主に使うのはM500と火炎手榴弾である。

M18は初空戦に持っていたのはいいものの、使うチャンスがなかったため

使うシーンがなかった。

M18はリベリオン合衆国（現実のアメリカ合衆国）が開発、製造した

最初の無反動砲、「M18 57mm無反動砲」の改良型なのかは不明として、

リボルバー銃のシリンダーを取り入れたオリジナルの無反動砲。

銃自体の長さは自信の伸長を少々抜くぐらい長く、重さはシリンダーも加えるため尋常なく重い。が、そこはストライカーユニットの

おかげもあるが何より男子なので苦勞なしに

持ち上げられる。感覚としては教科書を一杯詰めた手持ち鞆と同じ。

M18の特徴としてまず目に入るのはリボルバー銃につけてあるよ
うな

シリンダー。

そうは言っても大きさは一目瞭然、こちらの方が断然上である。

クロムスキット式で反動は滅殺され、その分初速が得やすいので当
てやすいうえに

大威力でもあるので通常の砲より多くの発射薬が必要とされるのは
代償としては安いものだ。

念のためスコープも取り付けてあり、外すことも可能。

散弾銃のM500は軍に入る前からこれで射撃練習をしていた愛用
武器。

射程距離わずか100〜150mという超至近距離でしか当たらない
のだが、

由希も伊達に射撃練習をしたのではないので、
高速に動いている的に対して10発中8発は確実に当てられる。

火炎手榴弾は今回の戦闘シーンで大活躍したものだが、
使った本人はあまり気に入ってない様子。もちろんこれには理由が
あるわけで

後ほど話の中で伝えていきます。

使用ストライカーユニット：SBD-5 ドントレス

P-51 マスタング

（マスタングはドントレスの整備時にネウロイが出現したときのみ使用する代わりのユニット）

今まで誰にも知られていなかった男子のウィッチ。

無名で突然リベリオン空軍に入隊してきたので軍は驚いた。

あまり有名でない訓練学校にまれにしか通っていなかったらしいがそれでも人並み以上の腕前を持っている。

服装は面白いワイシャツにベスト、セーター、カーディガンのどれかとブレザー、下は

ズボンだと邪魔になるので丈を膝より少し上ぐらいまで切り落とし、たのを履くのが基本。

非番時にはそのときの気分で服装を変える。

基本的に緊張感のないのんびり屋で礼儀正しく、知能がないような気がするがそこは気にしない。

体力には自信があり、いくら運動しても疲れないために

訓練学校では通称“疲れ知らず”と呼ばれていた。

撃墜数はchapter2での戦闘の10機。

由希には双子の姉がいるが今は最前線のカールスラントでネウロイを粉砕しまくってる最中らしい。

彼女は彼の師であり戦友であり唯一の血のつながりを持つ人である。父親はリベリオンの元武器開発者、母親は元扶桑軍のウィッチであったが、

ある事で両親がこの世を去った。そのとき両親が言い残した言葉が彼の戦う理由であり使命である。

固有魔法：爆弾化 ボムライザー

『物』であればほとんどのものが爆破できる。
対象物が火薬なら威力増大。

由希は自分の固有魔法の存在に気が付かされた。が…

イメージモデル：リチャード・アイラ・ボング
(あまり関係ない点もあります→)

キャラクター設定1（後書き）

いろいろと前の部分を訂正しましたので読みたい方はどうぞもう一回読んでください。

よろしく願います。

chapter 2・・・「雑談&トーク」(前書き)

投稿遅くなってすみません。

色々あつてなかなかできなかったもので。

それではどうぞ。毎度つまらないものですが楽しんでいただければ光栄です。

chapter 2・・・「雑談&トーク」

「おかあさん！おかあさん！うわーん！」

少し聞こえづらいけど誰かがそう泣き叫んでる。

目の前は真っ暗で何も見えない、だけど聞こえる。

どこか幼くなぜか懐かしく聞こえる声だ。

でもそれはすさまじい悲しみにあふれていてこっちまで悲しい気分になるな…

それでもその声は泣き止まずひたすら泣き続ける。

「なんで…なんで死んだの？おかあさん」

そのときその声とは違う声がした。

「きっと母さんは私達を守ろうとしたんだよ」

「ぐすっ…守る？」

「そう。だから…」

そこで会話は聞こえなくなった。もちろん泣き声も。あれは一体なんだったのだろうか？

まっ、そんなことは気にしないでおう。

しばらくの沈黙が続いた。

そして再び声がし始めた。

しかしさっきの泣き声でもなければ話っていた別の声でもない。もっと別の声だ。

大人っぽくはつきりとしたのが特徴的な、

中尉の声だ。

はつきりと言っても言葉が途中途中切れていけど。

「……由…、由希…由希さん…起きな…さい」

その声が聞こえたときだった。

僕の意識は覚醒した。

「はっ！」

がばっ！

がつーん！！

「痛つつー…」

気が付いて勢いよく起き上がってみればでこを何かに強くぶつけた。いやぶつかった。

そんな痛いでこを抑えつつ前を見てみると自分と同じように痛がつて顔面が掛け布団にめり込んでいる中尉の姿があった。

中尉の服装は気絶する前とは変わらず軍服に超短いズボン、それに白いニーソックス。金髪のロングヘアーは左だけ三つ編にされていてなんか邪魔そう。前髪は横にピンで留められているだけ。

とまあこんな感じ。

つてなるほど。ぶつかったのはこの人か。

「ち、中尉、大丈夫ですか？」

「た、多分大丈夫よ」

明らかに大丈夫じゃなさそうだなこれ…

おでこを押さえつつも返事を返してくる中尉殿を見つつ思う。僕以上に痛いらしいな…

「中尉、なぜぶつかったのですか？」

若干のブラックスマイルと共に聞いてみると一瞬中尉の顔がびくつと反応した。何した、この人。

「え、え〜っと…ただ起こそうと思って、ね」

「起こそうと思って？」

ブラックスマイルを残したまま眉をしひそめて見ると中尉の顔がどんどん気まずくなっていた。

「み、耳もとで「おきなさい」と言ってみただけよ。そしたら急に貴方が起きてきたから…」

「そうなんですか」

まああんまり気にするたちじゃないから適当に相槌をうつた。

年上の中尉が年下の軍曹に威圧で負けるなんて何か気が狂うけど、これがまさしく下克上ってやつかな。…違うか。

そんなことはどうでもいいとして、とりあえず部屋を見渡してみた。

いくつかの無人のベッドに椅子、壁際にあつた棚には本が数冊、応急箱、自分の持ってた懐中時計にメモ帳と鉛筆がおいてあった。横の椅子には未だにうつぶせのままの中尉がいた。ここが医務室つてのが今わかった。

ちなみに今気が付いたのだが、自分の着ている服が一着の着物みたいなものみになっていた。それに体中には傷が…

ってあれ？傷がない？

初のネウロイ戦で受けた傷は一つたりとも残ってはいなかった。

僕の怪我、確か相当重傷だったはずだけど…

「怪我のこと？怪我ならもう完全に治っているじゃない」

「中尉、今人の心読みましたね」

「いや、貴方が一人でぶつぶつ言ってたじゃない」

「…それ、どこら辺からでしたか？」

「確か「僕の怪我、確か相当重傷だった」辺りからね」

あ、さいですか。いつの間にか復活していた中尉が少しからかってきた。

でもあの戦闘から何日たったのだろうか。
ずっと寝てたから日時がわからなくなった。とりあえず、

「…以後気をつけます。突然ですがあれからどれくらい経ちましたか？」

突然ふられた話でもいつも（初めて見知って数時間も経ってないような気がするが）のように
冷静な顔で伝えた。

「あれから丁度1日4分の1と1時間の半分よ。あんな重傷をこんな

短時間で完治させるなんて貴方すごい回復力の持ち主だね」

この前までは指のかすり傷さえ治るのに数日はかかったのに回復するのがいくら何でも早すぎる。

日にちを確かめるようにカレンダーを見ても中尉の言つとおり同じ日だった。時計を見てもやはり彼女の言つとおりあれからそれくらい時が過ぎていた。

あと中尉、遠まわしに6時間30分つて言わないでくれ。脳内で変換するの面倒だから。

それはさておき、傷を見た際何か妙な物を見つけた。

丁度手の甲の辺りに小さな赤い点のようなものを見つけた。ま、この際気にしないでおこつと。

「ところで由希さん」

真面目な顔で改めて話しかけてきた。

「何ですか？」

「今日の戦闘中、シールドを展開してましたよね」

「はい、してましたけどそれが何か？」

「ネウロイのレーザーの一部を通してましたよ」

「へ？でもあの時レーザーは全部防いでいたように見えてましたけど」

あの時のシールドは人一人をカバーできるぐらいの大きさで十分威力もあつたはずだけど…

「もしかしてギリギリまで攻撃の方に魔力をまわしてたわよね？」

中尉の顔がより真剣になった。

確かに手榴弾を投げる際、適度に魔力を込めるがそこまで込めた覚えはない。

せいぜいストライカーユニットのエンジンに…なるほど、それが。

「また聞こえてるわよ」

「…今度はどこからですか」

正直、人に言われた事ができない自分を呪ってみたい。

「「確かに手榴弾を投げる際」からよ」

「すみません」

「いいのよ。それでユニットのエンジンに何かしたの？」

「ふらつきを安定させるためにエンジンで魔力を多く消費してるんです」

「ということは？」

「はい。僕、飛ぶことがめっちゃくちゃ下手なんです」

本日三度目の沈黙。

とその沈黙を一気にぶち破るようにして医務室のドアが勢いよく開いた。

そこに突っ立っていたのは一人の整備員。走ってきたのか息が少し荒い。

「廊下は走らないのが原則よ。あとドアはノックした後静かにあけなさい」

中尉に即座に怒られた整備員。ドントマインド。

「すみません、アーネスト中尉。その新人軍曹とアーネスト中尉に急ぎの連絡でして」

「新人軍曹」ってちょっとどこるかすぐくひでーな、こいつ。

「由希さんと私がどうかしたの?」

整備員が近づいてきて言いった。

「マーシャル大佐がおよびです」

本日四度目の沈黙。

毎度どうしてこうなるんだ?

「お二方、何かやらかしたんすか?」

「「さあ?」「」

珍しく中尉と声が重なった。

良くても悪くても呼ばれたからには行くしかない
そういうことでベッドの端に座った。

「怪我は完治してるけど、歩けるの？」

中尉が心配して声をかけてくれた。

足は問題なく動いてくれたので歩けるはず。

ということスリッパを履き、立って数歩歩いて見る。
予想通り歩けた。

「ちゃんと歩けますよ。ご心配なく」

「そう、良かった」

ちなみに整備員は僕がベッドの端に座ったときぐらいに「失礼します」と

言ってさっさと出て行った。

「えっと…自室に行つて服着替えてもいいですか？」

この服装ではさすがに失礼になるので着替えてきたい。

「ええ、いいわよ。部屋の前で待ってるわよ」

と言に残し、中尉は先に医務室を出て行った。

「さっさと着替えてこよつと」

そうボソツと呟いて自室へと向かった。

おっと、懷中時計忘れるところだった。

僕は棚においてあった私物を持って駆けて医務室を出た。

chapter 2・・・「雑談&トーク」(後書き)

次回はなるべく早く投稿しておきたいと思っていますので
全部読んで下さっている人はまたよろしく願います。
初見の方もよろしく願います。
以上、幻想飛行でした。

chapter 3・・・「大佐と対面」(前書き)

疲れたー！

まさかここまで疲れるとは思いませんでした。

…っと、それではいつものように。

間違いがあつたら遠慮なく感想を書いてもらってかまいませんので。

毎度つまらないものだと思いますが、それはそれで楽しんでください。

よろしく願いします。

chapter 3・・・「大佐と対面」

取り合えず医務室を出た僕は軍の基地内にある
広いコンクリートの壁の廊下をダッシュで駆け抜けた。

実を言うとこの服装、人にはあんまり見られたくない。

そりゃ、僕もお年頃な年齢だし、ね。

と、言うわけで廊下を走っていると一人の整備兵が
それはまあ暇そうに歩いて来た。よく見るとついさっき医務室に
いた人物だ。

身長は見る限り僕よりは背が高く何気に整備服がお似合いで、
黒髪の芝生ヘアが特徴な人だ。

しかしこの人、今頃はユニットの整備してるはずじゃないのか？
そう疑問に思った僕は聞いてみることにした。

「さっきの整備員さん、何してるんですか？」

「見ればわかると思うんツスが…っとこれは噂の新入り軍曹殿、失
礼。お名前の方は…」

表情を変えないままこっちを向いてきたものの、
質問には中途半端に答えてくれて、答えてくれなかった。
見ればわかるって言ってたからやはり休みらしいな。

…ん？噂？

「由希・ボング、由希でいいですよ。それより噂って何ですか？

あと、話し方はそのままでもいいです」

「では失礼して。その噂、『男子のウィッチが入隊してきた』というのッスね。

整備兵の中では半日足らずで広まりましたがご存知ではありませんでしたッスか？」

不思議そうな顔をしながら聞いてきたがさすがにその半日ずっと医務室で寝てたからな。ってそういえば自分のことか。

「そんなに広まってるとは知らなかった…」

「そもそも男子なのにウィッチって変だと思わないんッスか？」

そういえばこのことに対してあまり気にしたことがなかったな。

「そもそも魔法を使う人のことをウィッチ以外に呼び方あるんですか？」

「そりゃまあ、『ウィザード』とか」

「なるほど。でも僕は使い魔を憑依させるから違いますね」

「どう違うのかさっぱりわからないッスが」

永遠と続く話の中、僕は何をすべきか思い出した。

「あ、話の途中で悪いですが重要なことを思い出したのでそろそろ行きます」

「おお、こちらこそすみませんッスそれでは」

「取り合えず名前、教えてくれませんか？」

急ぎの中一応名前だけは聞いておきたかった。

整備員はにつこり笑ってはつきり言ってくれた。

「俺の名前はルーファス・テラードッグ。よろしくッス」

「こちらこそ。それでは」

テラードッグに別れを告げ、僕は急いで自室まで駆け出した。
やばいロスタイムが半端じゃない。

自室に着いた僕は部屋の壁にその背を合わせているクローゼットに
向かい、

下の引出しを開け、中を見た。

そこには白いワイシャツが数枚に灰色のベスト、同色のセーター、
赤と黒のストライプ柄のネクタイ、
それに義理の母が特注で作ってくれた真っ白いカーディガンと漆黒
のブレザーに

下に履く物として軍服下の丈を膝の上まで切り落としたものを収納
していた。

そして他にも色々な服も畳まれて同じく収納されていた。

僕はその中のワイシャツ、ネクタイ、カーディガン、ブレザーとズ
ボンを手に取り

すぐさま着替え始める。

数秒後その着替えもネクタイとブレザー以外は全部終え、その後僕は洗面器の上にある鏡で髪型を直すのにクローゼットの反対側にある洗面器の前まで移動した。

直すとは言っても髪はいつもとそこまで変わらなく下げていたが、アーネスト中尉からは「髪の毛を女の子らしく結んで来なさい」って医務室で突然言われた。

僕、男子なのになんでだろう、でも

「言うことを聞いて置くが吉」と言われたので気にしないことに。

女の子らしいと言えば…なんだろう？

そう呟いてからある人物の髪型を思い浮かべ…
というかその人しか浮かばなかった。

髪を糸で後ろに束ね、右目に少し前髪を掛かった少し短いがシンプルな「ポニーテール」という髪型だった。

試しにくくって見ると、あんまり似合っていない…

ような気がするの僕だけだろうか？

まあいいとしてネクタイを締め、ブレザーを着て（ボタンはしない）廊下へ通じるドアを開けるとそこには先ほどとは違い、軍服を完璧に着こなしている中尉が壁によりかかっていた。

こちらに気づき髪型を見たたん瞬間的ではあるものの、動揺していた。まさかこんなにポニーテールが似合う男子がいるとはとても考えていたのだろう。

「あら、可愛いじゃない。思わず抱きしめたくなるわ」

中尉、その言葉、男子としてはかなり痛い。

「褒めてもらい光栄です。ですがなんでこんなことを？」

「いずれわかるわ。あともう一つお願いがあるの」

もう一つあるのかよ。今度はなんなのだから…

「もっと女の子っぽくするために「僕」を「私」に変えてほしいのよ」

「え？」

普通に女子っぽい髪型させてそこまでやれと言うか。

昔から顔も身長も、体型、声さえも女子に間違われていたので髪はどうにかセーフとするけど、

一人称まで変えろとは、やはり男子としては絶対アウト。

あーもう、本当は嫌だけど

どうせ拒否してもやれと連呼し続けそうな人なので…

「わ、私ですか…」

「そう、それでいいわよ。」

なにやらせても可愛いわねこの子。ほんと抱きつきたいぐらい」

結果従うことにした。

「それでは行きましょ」

そう告げると中尉は歩き始めた。

そしてそれを追う『僕』。いや、今は『私』と言った方が正しいか。そしてようやく思う、恥ずかしいと。

しばらくは無言のまま廊下を通過し、目的であるマーシャル大佐のいる部屋の大きな鉄製のドアの前まで着いた。

ここまでの道のりの途中、すれ違いに見たテラードッグとは違う整備兵たちの目は明らかに女の子を見るものだった。

そんなに私が女子に見えたのかよとはさすがに口に出せず、下を向いてしまっていた。

…もう男子としてのプライドが入隊して早くもずたばろに。
(忘れている方には一応言っておきます。私はそれでも男子です)

中尉はその鉄製のドアを二回ノックし鉄の響く独特の音が響いた。そのあとはっきりとした声で言い放った。

「アーネスト中尉ただいま参りました」

その言葉の返事として喉太い声が聞こえた。

「少し時間が過ぎたがよろしい。入りたまえ」

と同時に鉄製のドアがゆっくりと開き始めた。
ここに入るのは初めてで大佐に会うのもこれが初。
声からして大体は予想できたものの、それでも実際見なくては
何もわからない。

私の軍人としての緊張とちよつとした恐怖心、
そしてまだ子供としてのわくわくと好奇心が
同時に起こり心臓が今にもネウロイのコアのように破裂しそう…

考えている間にあの鉄製のドアは完全に開いていた。

すぐに気づいたのだが最初に、この部屋にいたのは中尉と私を除いて
たったの一人。

たくさんの勲章などが付けられた軍服に身を纏い、
少し豪華な木製椅子に腰を掛け、腕掛けにたくましい腕を寄せ、
足を仕事机に堂々と乗せていた大佐（だと思われる）
男性のみだった。

本来なら護衛の一人や二人はいるはずなのだが
目で見る通り本当に彼以外誰もいなかった。

次に部屋を見渡すと壁に床、あらゆるものが木製であることがわかった。

大佐の座っている机に椅子、本棚、ランプ、クローゼット、カウンター（そんなものがあっていいのか？）に
その他もろもろとほとんど。広さ的には軍の個人の部屋（大体た
み13畳）より

ほんの少し広いぐらいで十分快適に暮らせるほど。

部屋にはなんの緊張感もぴりぴりとした空気もなく、逆に癒しや安心感、やすらぎなどが漂っていた。

まるで自分の家に帰ってきたかのように。

「何してるの軍曹。さっさと入りなさい」

入り口でぽかんと考え込んでいた私は中尉の怒りっぽい一言で我に返った。

「アーネスト、我はそんな厳しい話し方で後輩に接しろと言った記憶はないのじゃが」

「大佐殿、失敬かも知れませんがそれは甘すぎです。これでもたまにはやさしく接しています」

「それは良かった。うむ。」

「それより大佐殿、足を降ろして下さい。大佐なんですから」

「別によいではないか。誰の迷惑になっておらんのだし」

「そこが甘いのですよ。もう少し真面目にしてください」

「それは無理じゃの。はっはっはっは」

大佐が中尉に怒られる光景は普通の軍隊では滅多に見られないとし

みじみ思う。

怒られている本人は迫力のある笑い方で笑っていた。それを見た怒っていた側は口から小さなため息を漏らしていた。

「えーっと…由希・I・ボング軍曹だったわけの？」

「は、はい！」

またもぽかんと考えていた私は不意打ちを食らったように名前を呼ばれたのでびっくりしてしまった。情けない…

「まあまあ、緊張しなくてもよいぞ。くつろいでそこに座りたまえ。アーネストも」

「わかりました」

「あ、はい…」

大佐は二カッとはびつきの笑顔で言ってくれたがさすがに気を抜きすぎるのは失礼なのでほどほどに気を抜き、大佐の指差す方向にあった木製のソファに座った。

でもこの大佐、戦争中だと言つのによくそんな笑顔がでるな。

「少しは落ち着いたかの？」

「はい」

足を机の上から降ろし座っていた椅子から腰を上げてこっちに歩いてきた。

ただ歩く姿でもすさまじい偉大感を感じられた。

歩いて目の前まで来た大佐が予想以上に大きかった事に対して決して表に出すことなく仰天。

二メートルはあるのだろうか、上を見上げなければ顔が見えない。私より身長の高い中尉でさえも楽々と抜かれていた。

白い顎ヒゲにごつい唇、高い鼻、鋭い目つきだがやさしさも入っている、

筆みたいに太い眉毛、どこかの艦長の髪型の上には小さな銀の星が三つ並んだ佐官の被る帽子を乗せていた。

で、さっきも話したとおり数々の勲章をつけた軍服を身にまとっていた。

こうして改めてみるとすごい人なんだと思う。

「ゴッホン、では改めて言わせて貰おう。

初めまして、我はマーシャル・フォード大佐じゃ。

そしてようこそ戦場へ。由希・I・ボング軍曹殿」

立派な敬礼をしてくれた。軍隊だなど今やっと思えたような気がした。

「これからよろしく願います、大佐！」

そう言った後、私も敬礼した。

「返事が良くてよらしいの。さて本題に入るのじゃが…」

そこで少し間をおいて聞かれた。

「もし聞くならどっちがいいのじゃ？右か左」

右か左？

「それはいい話と悪い話ということですか？」

「いや、そうではないんじゃない。むしろどちらともいい話なんじゃない」

それなら良かった。なら適当に。

「左でお願いします」

良からうと言いたげな顔をして語り始めた。

「初空戦にして初戦果。おぬし、さらに一発の攻撃で十ものの敵を撃墜したそうじゃな」

「はい、そうですよね中尉」

と今まで黙り込んでいた中尉に確認をとると彼女は静かに首を縦に振り言った。

「ええ。小型でコアさえも分裂して増加する新型だった一発の手榴

弾で」

その確認を見た大佐もうなずき続けて話した。

「うむ。それでおぬしにはこれを渡そう」

そっくり終わると机に向かいその机の引き出しを引いて中にあつた小さな木箱を取り出し、引き出しを戻してこつちにまた歩いてきた。

大佐がその手の中の小さな木箱をあけて私に見せてくれた。その中にあつたものは『く』の字のような刺繍が三つ横に並んで施された…腕章？

「これは腕章ですか？」

「そうじゃ。カールスラントみたいに鉄十字章はないのが残念じゃがおぬし持つておらんかったじゃろ、腕章」

そういわれてみれば軍の基地に着いてスクランブルが起きて中尉と私以外誰も出れる人がいなかったからすぐ出撃したから貰つてないな…

「たしかに持つてませんでした…」

「というわけじゃ、これで我慢してくれ」

「それと気持ちだけで私は十分です」

「それは良かった。続けて二つ目の話じゃが、
今扶桑人が一人この基地に来ておつての、さっきの話を聞いて
おぬしに会ってみたいとの話じゃ」

「私…にですか？」

扶桑人が、お母さん以外見たことないな。

「で、どうするんじゃない？」

会ってみるだけ会ってみようか。
というわけで返事は。

「会って見たいと思います。その扶桑人に」

大佐の気が付かない間に真面目だった顔にはうれいような
悲しいような笑みが現れた。

「そうか。ならあとでアーネストに面談室まで案内してもらつがよ
い」

そこから何十分か私は大佐に質問の嵐をぶつけていた。

話が終わると同時に中尉の口が開いた。

「それでは行きましょ軍曹」

またもや黙り込んでいた中尉が私をドアまで誘導してくれた。

「それでは失礼します」

「色々ありがとうございます」

「礼はいらんよ。渡すものを渡して話をただけじゃからの」

「それでは改めて失礼します」

大佐に別れの挨拶を告げてドアの完全に閉まる音が聞こえた直後のこと。

「疲れたわ」

中尉は相当お疲れの様子。

「お疲れ様です中尉」

一言かければガス欠した車のような音が中尉の口から出た気がした。

「ところで中尉」

呼びかけてみれば普段通りの顔に戻っていて首をかしげた。

「何？」

「私のこの一人称、もう戻していいですか？」

「そのことね。いいわよ、でもそっちの方が断然似合ってるわよ」

「そうですか？それならもう少し続けますけど…」

実はもうこれが根付いてしまっていて変えにくくなったとは口に出

しにくい。

「ぜひそうしてほしいわね」

「ではそうします」

「取り合えず面談室に行きましょう。

貴方が寝ている間に会いましたけど本当に会いたいらしいわよ。
あの扶桑人」

そこまで会いたがっているのか。

「そうですね。待たせるのも悪いですし行きましょう」

その扶桑人がどんな人なのかをまたわくわくしながら
私は中尉のあとを付いていった。

一方

「由希・I・ボングか、どんな奴か楽しみだな」

面談室では笑みを浮かべつつそう呟くその扶桑人が座って待っていた。
た。

chapter 3・・・「大佐と対面」（後書き）

いやー寒いです。ほんと。

リビングのエアコンのはずなのにむっちゃ足、寒ス！！
もう3月だというのに…

そんなことはどうでもいいとしてどうでしたか？

楽しんでいただけたでしょうか？

まだというか多分永遠素人ですがこの小説を読んで下さっている方、
心の中で応援してくださっている方はありがとうございます。そして
次回もよろしくお願いします。

以上、幻想飛行がお送りしました！

chapter 4・・・「招待状」(前書き)

毎度投稿日がばらばらな幻想飛行です。

やっとらしくなってきたような感じがするだけな感じです。

今回も楽しんでくだされば光栄です。

ではどうぞ。

chapter 4・・・「招待状」

歩いて数分、この広い基地内を地図もなしに歩いていく
中尉を少し尊敬しつつその後ろに続く私。

無言で歩き続けていると、
突然中尉の口が開いた。

「あの扶桑人、眼帯してたけどあれは一体…」

「いきなりなんですか中尉。急に話し出すなんて、
らしくないですね」

「え、あ、何でもないの。気にしないでね」

ただの一人言だったようで不意に話しかけたせいなのか
中尉は少々動揺していた。

ってあれ？今急に言葉遣いが軽くなったような…

気のせいだと思い込みつつ

丁度聞きたい話題があつたので持ちかけてみた。

「中尉、質問があるんですけど」

「何ですか？由希さん」

「固有魔法って何でしたっけ？」

一つ、いや、二つ説明しておく、私の師匠と呼ばされてる双子の姉にウィッチの基本的なことは全て叩き込まれているのだが、固有魔法のことを忘れてしまっていた。

べ、別に構ってほしくてわざと忘れてるわけじゃないんだからね。

…男子としてこれはないな。

「あら。貴方、基本的な知識はあつたはずじゃないの？」

「すみません、すっかり忘れてしまつてて…」

中尉はため息交じりの笑顔を作った。

つてなぜため息？

「仕方がないわね。もう少しで到着するから簡単に説明してあげるわ」

そついうと固有魔法について私に話をさせる隙を与えず説明し（語り）始めた。

「固有魔法とは一人一人のウィッチがそれぞれ持っている魔法のことよ。

分類としては攻撃型、感知型、それに念導型ねんどつがいがあつてそれぞれ能力が違うの。

例えば私の魔眼系魔法、セカンドサイト千里眼」

「千里眼？」

思わず繰り返すように言ってしまったが気にせず中尉は続けた。

「ええ、肉眼では見えない敵を見つけれ^{ネウロイ}る上に、
近くにいるときは敵を透視してコアも見つけられるのよ。分類的に
は感知型よ」

「そうなんですか」

頷きながら聞いているとさらに付け足してきた。

「貴方にもあるのよ」

「ほんとですか？」

「ええ本当よ。現に貴方の初空戦であつたあの爆発、
あれはそれよ。あれだと爆破系？それとも有爆系なのかしら……」

あ、あれは魔法だったのか…となんとなく納得できた。
詠唱なしで発動はできるものなのか？

さっきからぶつぶつと自問自答してる彼女に聞いてみた。

「中尉、固有魔法は詠唱なしでも発動できるのですか？」

自分世界から帰還してきた中尉はえ、つと言つ顔でこつちに振り向
いた。

そんなにのめり込んでいたのかこの人は。

そんな中尉に今度はこつちがため息をついてさっきと一字一句違わ
ない

質問を繰り返してあげた。

そういう質問かという顔で頷き答えてくれた。

「それは種類によるわね。もちろん私ののは詠唱なしでもオツケーよ。貴方のはよくわからないけど大体はしなくてもでもいいと思うわ」

「そうなんですか」

そうこうしているうちに複数のドアが両壁2列に並んだ一本の廊下に着いた。

「着いたわよ。確か…三番目だったはずだったわね。
ノックしてから失礼のないように入るのよ」

1、2、3、4…と興味本心でドアの個数を夢中に数え、その場で立っていた
私を中尉が背中を押して三番目のドアの前まで連れて行った。

…もつと数えたかった。

ここまで来たのでしょうかがなく入る事にした。

コンコン。

「お、来たか。入っていいぞ」

ノックと共に響き渡る音に少し遅れて
ドアの向こう側から凜とした声が聞こえてきた。

「失礼します」

ついさっき言われた通り、失礼のないように入るとそこには鞘にきれいに収まっている扶桑刀を腰に携え、右目には眼帯、

初めて見る扶桑の軍服（そもそも扶桑の軍服を見ることが自体初めて）とその下にはたぶんであろうボディースーツを着用している扶桑人がいた。いや、いらっしやった。

「えーっ…と…」

あまりの緊張に言葉が喉に痞えて思うに話せない。

「そんなに緊張しなくていいぞ。

そこにある椅子に座って気持ちを落ち着けたらどうだ？」

「あ…はい…」

言われるままに椅子に座り、気を落ち着けた。

ここで質問しようと思いを開けようとしたが先に向こうが口を開いた。

「先に言っておくが普段通りに話していいんだぞ？」

「あ、じゃあ言葉に甘えさせてもらい普段どおりに…」

ひと段落してまず、聞くべきものを聞くことに。

「取り合えず、名前はなんですか？」

「おっと、まだ名乗ってなかったな」

そういうと凜々しい目つきでこっちの目を真正面から見つめはつきりと名乗った。

「私は扶桑帝国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊所属、坂本美緒少佐だ。今はブリタニアに編成されている連合軍第501統合戦闘航空団にいるのだから」

「…少佐ですか」

「ん？どうかしたか」

「いや、私の姉と同じだなんて思いまして」

「ほー、それは気が合いそうだな。後でいいから紹介してくれで、お前は」

「私はリベリオン第401航空遠征航空団に所属の由希・I・ボングです」

「ちょっと違ったか」

「なにが違ったのですか？」

なぜ自分の名前が違うのかは、さっぱりわからない。

「ああ、お前の資料を読ませてもらったのだが名前の読み仮名を“ユキ”と思っててな」

「あー、そのことですか。そのままいいですよ。そっちの方が呼びやすいでしょうし」

「それなら遠慮なくそうさせてもらうぞ」

それはそうとして、もう一つ。

「それで、坂本少佐は何をしにここまで？」

その質問を聞いて目に迷いを見せず即答した。

「もちろん将来有望なウィッチを探しに来たんだ」

「なるほど」

「それでここにいるときにたまたまお前の噂を聞いたわけだ」

「それはどんな噂ですか？」

おそらくはあのことだろうと予想しつつも聞いてみる。

「ユニットも履いた事もない新人のウィッチが

初空戦で十数機ものネウロイを全て一人で撃墜したそうだな。
さらにその十機はたったの一撃で」

そっちの方が。男子の事かと思ってた。

「私が呼ばれた理由はそれだけですか」

「それだけではないぞ。男子とは驚いたものだな。
そんなの世界中探してもお前ぐらいしかないぞ」

いまさらではあるものの扶桑の少佐は物珍しそうな顔をしていた。

「あとなぜそんな髪型をしてるのだ？」

男ならもう少しらしい髪にすればいいだろう」

そのことは聞かないでくれ。私もなぜそうしたのかわからないから。

そう思う私であった。

「で、私にはどうしてほしいということですか？」

そこまで理由があつて予想がつかないはずがない。
が、聞いておく。

「お前にはこつち⁵⁰¹に来てほしい。でも無理は言わない。
返事の期限は3日後の正午までだ。この基地の港で待っているぞ。
それまでになかった場合は…」

「…わかりました。考えておきます」

さつきから少佐から発せられている様な肌にぴりぴりくる
オーラを感じるのは気のせいだろうか…

「まあ今日はこの辺で解散だ。もう遅いしな」

と言うとオーラを発してた人が立ち上がり部屋を出て行った。
その間際、彼女はある一言を私の耳元で囁いて行った。

「……………」

その一言で私の脳は長い時間停止したかと思えた。

どれくらい時が過ぎたんだろ。

一秒？一分？一時間？はさすがにないか。

でも、それくらい思えるくらいだった。

さあこれからどうしたものか。

いきなり501への勧誘。

これはいいことなのか？それとも逆なのか。

そんなこと基本的知識はあるが今日軍に入隊したばかりの新人が知るはずもない。

「ふあゝゝ…」

大きなあくびが出てしまった。

あれだけ寝てまだ足りなかったらしい。

考えていても何も始まらない。

というわけで今日は寝ることにした。

ドアを開け付近にいた中尉に部屋までの道案内を教えてもらい
単純に部屋に帰った。

ちなみに中尉は別の用がどうこう言って大佐の部屋に行きました。

ブレザーとネクタイ、カーディガンを近くに脱ぎ捨て、

私はベッドに倒れこみそのまま目を閉じた。

chapter 4・・・「招待状」（後書き）

今回でようやく501のメンバーが一人出ました〜
キャラ崩壊していたらすんません。（汗

つとまあこんな調子でこれからも書いていきますので
よろしく願いします。

以上、幻想飛行でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9782p/>

ストライクウィッチーズ Gift From Heaven

2011年10月8日13時58分発行